

東アジア反日武装戦線と私たちの来た道、行く道



5年連続集会
最終回(第5回)

虹の彼方へ

救援すること／されること

浴田由紀子さんを迎えて

記録映像 「虹の彼方へ」 (撮影・編集：馬込伸吾)
記念講演 「奪還は救援の最高形態だったか」
山中幸男 (救援連絡センター事務局長)
発言 足立正生／荒井まり子／内田雅敏／伊達政保ほか
あいさつ 浴田由紀子



2017年5月13日(土曜日)午後3時開演～ [開場午後2時30分]

文京区民センター3A

都営地下鉄三田線・大江戸線：春日駅A2出口徒歩0分／丸ノ内線・南北線：後楽園駅徒歩5分／JR：水道橋駅東口徒歩10分

参加費／1000円

※閉会后、同会場で「虹会」を持ちます(午後6時頃～)／別料金です(1000円前後の予定)
飲食物等の持ち込み歓迎(余った際は持ち帰りにもご協力ください)

主催／東アジア反日武装戦線への死刑・重刑攻撃とたたかう支援連絡会議

連絡先／電話：03-3812-4645(風塵社)／E-mail:sienren@gmail.com

救援すること／されること

今年が、5年連続集会「虹の彼方へ」の最終回となる。当初の予定通り、浴田由紀子さんに参加してもらって第5回を迎えられることは何よりだ。出所歓迎会の様相を呈することは避けられないだろうが、でも、あくまで「東アジア反日武装戦線と私たちの来た道、行く道」という副題に示したように、反省と展望の共有、共生に寄与する内実を伴った集いになればと思う。これまでの4回もそれを強く意識して企画してきたからこそ、回を重ねる度に、若い、新しい参加者を得ることもできたのだと思う。

☆☆☆

救援する者と救援される者とはどんな関係が期待されているだろうか。恋人のように向かい合う関係だろうか。同志のように権力に立ち向かう関係だろうか。もちろん一概に言うことではないが、獄中者が獄外の支援者に求める思いと、獄外の支援者が獄中者に期待することの齟齬が様々な軋轢をきたしている姿を、私たちは日常的に見聞してきた。

☆☆☆

若い人たちの、それぞれの「良心」に拠った行動が、思いがけない結果と共に、新たな弾圧を引き起こす。それも幾度となく繰り返されてきたことだ。「共謀罪」が焦点となっている今、「救援」すること／されることの意味と現実を、生身の当事者が再会を果たす場で共有したい。

以下は5年連続集会「虹の彼方へ」第1回(2013年5月)開催にあたっての呼びかけの再録です。

■東アジア反日武装戦線の彼らは……

1975年5月19日、連続企業爆破事件の容疑者として多くの若者たちが逮捕されました。

逮捕時に自殺した斎藤和(敬称略・以下同)、日本赤軍のハイジャック作戦により「超法規的措置」として解放された佐々木則夫、大道寺あや子のほか、既に服役も終え社会復帰している人、そして、現在も獄中の4人がいます。

大道寺将司、益永利明(旧姓・片岡)は、8名の死者を含む多数の被害者を出した三菱重工本社爆破事件等を起こした「狼部隊」のメンバーとして死刑判決が確定しましたが、彼らに事件での「殺意」はなかったとして再審請求が続けられています。両名とも近年、健康状態が心配されています。

「さそり」部隊だった黒川芳正は無期懲役判決を受け宮城刑務所で服役しています。判決確定当時は「無期といっても模範囚でつとめれば十数年で仮釈放で出られる」などと言われていましたが、その後の刑法改悪や厳罰化傾向もあり、無期囚の仮釈放はほとんど認められなくなっています。

「大地の牙」部隊のメンバーだった浴田由紀子は、1977年に日本赤軍のダッカ・ハイジャック作戦で解放された後、1995年にルーマニアで身柄拘束、強制送還されて裁判がやり直されました。懲役20年の判決が確定し、現在栃木刑務所に服役しています。

■私たちは……

私たちは、この逮捕以降、彼らの獄中生活と裁判闘争を支援してきました。支援に立ち上がった者の思いは様々です。彼らの闘いをそのまま肯定するわけではなく、むしろ、批判的に見るとしても、私たちは、同時代を知る者として、国家権力や社会のあり方に対する彼らの異議申し立てに理解、共感できることも多々あったのです。黙って彼らを、彼らが撃とうとした権力の手で裁かせるわけにはいかない。彼らへの弾圧を見過ごすことが、あたかも「大逆事件」後の「冬の時代」の再現に繋がってはならない、と思ったのです。

■若い人たちへ

彼らの闘いが私たちに衝撃を与えたのは、単に事件の被害の大きさによるものではありません。三菱事件の前に彼らが準備していたのは、当時、まだ存命していた昭和天皇＝ヒロヒトの戦争・戦後責任を問うことでした。彼らは天皇を乗せた列車が通る荒川鉄橋に爆弾を仕掛けようとしたのです。未遂に終わったその作戦は「虹作戦」と名付けられていました。

また、企業爆破事件の際に彼らが出した「声明」は、アジアへの経済侵略のおこぼれにあずかる「日帝本国人」の姿を厳しく指弾するものでした。

マスコミが紹介することはほとんどありませんが、こうした彼らの提起に、自らのありようを振り返らされた人びとは、決して少なくありません。

今、3・11東日本大震災後の原子力発電事故による放射能汚染が、日本国内にとどまらず、人類の未来に悪しき影響を与え続けている中で、なお、日本政府・産業界は原発を維持しようとするばかりか、ベトナムやインドなどに危険な原発を輸出しようとしていっています。

このような時代にあって、今一度、「東アジア反日武装戦線」が提起していたものを、若い人たちとともに考えたいと思います。

■虹の彼方へ

彼らの一斉逮捕から38年目の5月19日が近づいています。この数年、彼らを全身で支えてくれた彼らの家族や友人、支援者たちの訃報が相次いでいます。

私たちの多くは、「死を賭して闘う」ことを英雄視する文化に育まれてきました。しかし、今思えば、それも「生きていることが当たり前」の生命力旺盛な若者の驕りであったかもしれません。

獄中も、獄外も、等しく年老いた危うい日常を生きるなかで、「健康」とは「可能性」に他ならず、「生命」こそ「希望」そのものに他ならないのだと、改めて思います。私たちは、何よりもその「可能性」と「希望」を守っていかねばなりません。

私たちは、彼ら個人の救援・支援にとどまらず、死刑制度の廃止や、無期懲役囚の仮釈放を促進する運動等に取り組んできました。私たちの見つめる方向は間違っていないと信じていますが、その展望は定かではありません。

しかし、確実に、浴田由紀子さんは4年後(2017年)の3月に栃木刑務所を出所します。

その日を、獄中獄外、お互い元気に迎えるべく、これから毎年、3月～5月の期間に集い、彼らと私たちの来た道、行く道を語り合い、考えるひとときを共にしようではないか、と、5年連続集会を企画した次第です。

毎年のある1日を、薪のように燃やしながら、命をつなぎ、希望をつないでいきませんか。

思いを共にする仲間たちの参加・協力を訴える次第です。